

ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジとの交換留学

名古屋大学と英国ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジ (St John's College、以下、SJC と略す) の短期交換留学協定は、2014年9月に調印され、2015年3月から2週間の交換留学が始まった。毎年3月に6名の名大生がSJCを訪問し、7月に6名のSJC生が名大を訪問している。SJCは1511年創立で、ケンブリッジ大学にある31のカレッジの中でも名門の誉れが高い。卒業生からは8人のノーベル賞受賞者(量子力学を創った Paul Dirac、ノーベル化学賞を2回受賞した Frederick Sanger 等)、6人の総理大臣等を輩出している。この交換留学制度は、私が2011年7月から12月までの6か月間、名大の特別研究期間制度を利用して、SJCの学長(Master)でケンブリッジ大学化学科教授の Christopher Dobson 氏を訪問したことがきっかけでできた。私はこの滞在中で、素晴らしい研究成果を多く生み出してきたSJCの学問的雰囲気・土壌に強く感動した。その後、パリの研究所に移動したが、最初の1ヶ月程、毎晩のようにケンブリッジにいる夢を見た。そして、SJCを名大生達にも見せてあげたいと思うようになった。私は、その後も、共同研究で、数日間ずつ再訪問してきたが、2013年12月の訪問時に、Dobson学長に、両大学の学生が相互訪問できるような交換留学を始めたいと提案した。すると、「名大なら相手として申し分ないので、ぜひそうしよう。アジアからケンブリッジ大学へは、シンガポール人、中国人、韓国人等が多く留学して来ているが、日本人の留学生はほとんど見ない。英国と日本は長い歴史と伝統を大切にしている価値観を共有するので、もっと交流すべきだ。お互い、優秀な学生を送ろう。期間は短いけど、これがきっかけになって、日本人のケンブリッジ大学(の大学院)への留学が増えることを期待する。」と言われた。そして、詳細は Senior Tutor (学生部長?) の Matthias Dörrzapf 先生と詰め、以下のようにした。分野を問わ



Robin Glasscock 先生宅で afternoon tea (2015年3月)

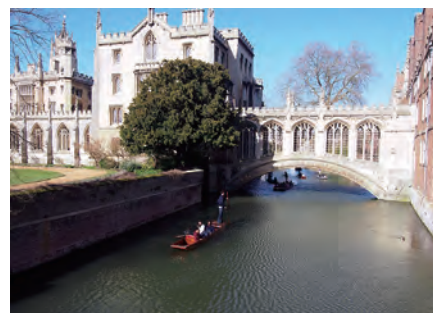


SJC 生と Dörrzapf 先生夫妻等の着物着付 (2015年7月)



Hall (大食堂) での formal dinner の後で (2016年3月)

ず、学部生(現在は大学院生も可)を派遣する。遊びだけにならないように、派遣側が休暇中で、受け入れ側が学期中に留学させ、講義を聴講させる。講義以外の文化活動では、SJCや他のカレッジのツアー、punting と呼ばれる小舟の Cam 川下り、afternoon tea、演劇鑑賞、ロンドンの博物館ツアー等がある。一方、SJC 生の名大訪問時には、G30の英語による講義を聴講し、研究室、大型計算機センター、減災館等を見学する。また、文化活動では、からくり人形の講義と実演、国際教育交流センター企画の生花、着物着付、書道、折り紙等、医学系研究科 YLP 企画の柳生新陰流の講義と剣法体験、大相撲名古屋場所観戦等に参加する。SJC 生の留学費用はSJCから全額支給される。Dörrzapf 先生は、「卒業生からの寄付金で賄う。一度SJC生になれば、



SJC 内に架かる Bridge of Sighs の近くで punting に興じる SJC 生と名大生 (2017年3月)



松尾清一総長主催の Farewell Party (2017年7月)



Dobson 学長による Master's Lodge (学長宿舎) のツアー (2018年3月)

貧富に関わらず同じ権利を持つべきだからだ。」と言った。名大にはそれは無理だが、双方の学生の寮滞在の宿泊費を無料にすることは同意できた。幸い、名大生の航空券代の大部分やSJC生の大相撲入場料等には、東海東京フィナンシャル・ホールディングスからの寄付金を利用して頂いている。この交換留学は人気があり、両大学とも毎年30名を超える応募がある(5倍余の競争率)。本制度をご支援下さっている全ての方々に感謝したい。



岡本 祐幸
理学研究科物質学専攻(物理系)教授